

佳作

「創造する・挑戦する」

—想像を創造へ—

東京都市大学等々力高等学校 一年

大塚 瞳

想像する。両耳から音が聞こえる世界を。

私は右耳が聞こえない。片耳の先天性難聴者だ。幼少期、病院で幾度も検査を受けたが音を拾う神経が無いと予測されるのみの、未だ原因不明で治療不可能な病気である。すなわち私の右耳は無いに等しい。そのため補聴器は全く意味を成さず、付けることはない。

幸運にも左耳は異常な健全な耳だから私は健聴者と同じ生活を送ることが出来る。しかし健聴者という普通の人間として振る舞うことは時として私を苦しめる。

片耳難聴者にとつて会話ほど恐ろしいものは無いかもしれない。私の右側で話す人の声は何も聞こえず、反応出来ないからだ。常に焦りながら周囲の表情、視線、動作を確認して周りの反応にワンテンポ遅れて合わせる。思い思いの反応をする人との壁を嫌でも思い知らされる。壁は私と普通の人の

境界線。聞こえる振りは、余計に惨めさを募らせるだけだ。

健聴者ぶらず、他者に真実を話すことが出来たらどれだけ楽になるだろうか。しかし、普通の人に懂れた私は自分を健聴者と偽ることが上手になってしまった。その上、補聴器も付けていないため、客観的には誰も私が難聴者とは気付かない。そのため真実を打ち明けても嘘と思われるか、氣遣わせてしまったり。苦い過去の経験は私を脆く、弱く育ててしまった。

自分の運命は線路通りに歩くしかないと分かっている。それなのに、今でも毎晩、想像するのだ。右耳からも音が聞こえる世界を。私が一生聞くことのない音で溢れた世界を。テレビ、音楽、雨、電車、足音、自動車……。私を当たり前に関わる音はどんなメロディーなのだろう。自分の声は？友達の声は？家族の声は？変わらないのか。それすら分からない。どれだけ輝く世界だろう。どれだけ音が煌めく世界だろう。そう思って今夜も私は、一人虚しく、美しく儂い夢を想像して眠りに落ちるに違いない。いつか正夢になるのではないか。そんな夢物語を拭い去れないなんて笑われてしまう。物心がつき、片耳から音が聞こえないことが万人共通の当たり前ではなく、自分だけが異常であると理解した。幼いながら、どうにもならないと、家族の反応から悟ることが出来た。正常な左耳のおかげで不便を感じることは殆ど無いもの

の、「平気だよ」と笑う私の顔にはどうしても偽りが含まれる。健聴者と難聴者の間を行き来して生きる困難と悲しみを消すことは不可能だ。そんな私に、人生の道標を示す様な、私の志を変える起爆剤となった出会いが二度訪れた。

必然なのか、偶然なのか、小学生の同級生に私と同じ右耳の先天性難聴の友人が居た。二人だけの通学路は右側の立ち位置を奪い合って笑い転げる、私達しか経験出来ない特別な空間だった。驚くことに、検査を受けた病院と担当医まで一緒であった。故に、走馬灯の様に蘇る担当医の言葉。彼は私の診察に立ち合っていた研修生の一人を「彼女もね、片耳が聞こえない。でも、立派なお医者さんになるよ」と紹介した。その女性は誇らし気に私に微笑みかけた。誰よりも凜として輝いていたことを今でも鮮明に覚えている。

彼女の様な医者になれば、私みたいな、たった一人の患者の心だけでも勇気付けられるだろうか。唯一無二の思い出を作ってくれた私と同じ右耳難聴の友人を心から笑顔にさせられるだろうか。将来を真剣に考え始めた高校生の今、私は強く願うのだ。

私は、医者になる。

千人に一人の割合で誕生する先天性難聴者。彼ら彼女らもまた両耳から音が聞こえる世界を想像しているのだと思う。先天性難聴の原因を突き止め、完治させる。想像していた夢

を、この手で創造して、正夢にしよう。絶対にしてみせる。未来でいつか、必ず、私の口から貴方にこう話す日が来ることを待っていて欲しい。

「創造した。両耳から音が聞こえる世界を。」